

会 議 録

会 議 名	令和4年度第1回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和4年4月27日（水）18時30分～20時20分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 加藤治紀委員 河田京子委員 坂井文枝委員		
欠 席 委 員			
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 小野、津端 同 はけの森美術館学芸員 中村、河上、西尾		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由		傍聴者数	0人
会 議 次 第	(1) 展覧会鑑賞 (2) 人事について (3) 事業実施報告等 (4) 令和4年度の事業予定と予算について (5) その他		
会 議 結 果	別紙のとおり		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	事業実施報告・予定表及び 予算について		

【鉄矢会長】 皆様、こんばんは。本日は御多忙の中お集まりいただき誠にありがとうございます。

ただいまより、令和4年度第1回小金井市はげの森美術館運営協議会を開会いたします。

配付資料の確認をします。事務局のほう、確認をお願いできますでしょうか。

【事務局】 お机の上に次第のほかは資料1から資料4までの資料がございます。資料1が開催中の展覧会・教育普及事業というタイトルで始まっているものと、あと資料2がA4横の表になっているもの、資料3がホチキス留めの企画のアンケート、そして資料4が、またA4の横になっております、予算の説明になっております。またそれとは別に、各館の展覧会のチラシを置かせていただいております。また、紫のチラシになるんですけども、後ほど御説明しようかなと思っておりますが、委員会の委員の募集のお話と、あと前回の会議録も置いてございます。今、お机に置かせていただいているものは以上になります。市の職員の分は、紫色のチラシのほうは置いてございません。

以上になりますが、足りないもの等ございませんでしょうか。

【鉄矢会長】 大丈夫です。皆さん、大丈夫ですか。

【事務局】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 では、まだコロナも減っていないので、会議のスムーズな進行に御協力ください。

2番、人事について、次第2について、事務局から委員の人事の報告をお願いいたします。

【事務局】 河田です。それでは、4月1日付の人事を報告いたします。これまで美術館を担当していた吉川が定年退職となりました。また、これまで吉川と一緒に担当しておりました岡本のほうも別の事業の担当になります。後任としまして、新しく美術館の担当になりました小野、津端でございます。一言ずつ。

【事務局】 コミュニティ文化課の小野と申します。コミュニティ文化課配属はもう丸3年たっているんですが、今までは駅前にある宮地楽器ホールの方の担当をしておりました。新しく美術館の担当になりましたので、よろしくお願いたします。

【鉄矢会長】 よろしくお願いたします。

【事務局】 私も丸3年、コミュニティ文化課におりますが、今までは市民協働とか国際交流など別の事業を担当していました。4月から美術館を担当しております。どうぞよろしくお願いたします。

【鉄矢会長】 よろしくお願ひします。

【男性】 もう一度、お名前を伺つても。

【事務局】 ツバタと言ひます。

【鉄矢会長】 三重の津に。

【事務局】 はい、端っこの端という字を書きまして、津端と言ひます。

【事務局】 小野になります。小さいに野原の野で。

【男性】 ありがとうございます。

【事務局】 では、よろしくお願ひします。

【鉄矢会長】 よろしくお願ひします。

【事務局】 また今回、学芸顧問の先生に就任いただきましたので、御報告いたします。

令和4年4月1日付で、河合晴生先生に本館の学芸顧問をお願いすることになりました。

収集委員会のほうで御縁がありまして、今回、顧問の就任について御快諾いただきました。

先生、一言よろしくお願ひします。

【河合学芸顧問】 河合です。この美術館を育ててきたと言ってもよい薩摩雅登さん。彼とは東京都現代美術館の開館準備以来、また藝大美術館でもいろいろとお手伝いとおせつかいをさせてもらう仲でした。で、はけ美でもちょいと付き合ってくれということで、多摩美術大学の本江邦夫さんと収集評価委員を引き受けたのがこちらの美術館とのお付き合いのはじまりでした。お二人とも鬼籍に入られ、私も10年近く委員を仰せつかったのでそろそろ引退と考えていたところに、学芸顧問のはなしをいただいた次第です。何事にもアグレッシブな薩摩さんの後任が務まるのかとためらいましたが、学芸の立場で少しでもアドバイスなり後押しなりができればと思ひまして…ご助言などをお願いいたします。

【事務局】 学芸顧問を迎えられたということで、大変うれしく思っております。

人事の報告は以上になります。どうぞよろしくお願ひいたします。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。こちらの紹介はしなくていいんですか。

【事務局】 そうですね。一応、自己紹介で一言ずついただきますでしょうか、委員のほう。

【原田委員】 公募委員の原田でございます。よろしくお願ひします。

6月からですね、新しい2期目に継続して担当いたします。この美術館のファンの一人として、ファンを広げるにはどうしたらいいかということで一生懸命考えております。よろしくお願ひします。

【鉄矢会長】 会長の席に座っています鉄矢悦朗と申します。東京学芸大学でデザイン

を教えております。薩摩先生が藝大で教え始めたときの一番最初の学生です。

そんな縁もあったのかどうか分からないですけど、学芸大に着任したときに、まだ市に譲渡されていなかった、はけの森美術館の企画提案書で、こういうふうにしなないかというのを出したりなんか勝手にしていた縁で、ここに関わっております。私も河合先生にずっと擦れ違っていたんですね。

【河合学芸顧問】　そうですね。まさか藝大で教えていませんよね。

【鉄矢会長】　私は藝大では教えていないです。非常勤で助手をやっていました。建築科です。建築科出身です。どうぞよろしくをお願いします。

【山村委員】　今、東京都美術館の学芸担当課長をやっております山村と申します。私も薩摩先生、芸大で、その前から知っていますけども、近くにいて、やってくれないかということで、もともと23年間、府中市美術館にいましたので、はけの森は非常に親しく感じていまして、それからずっとお世話になっております。

今度、河合さんが。河合さんは東京都美術館の先輩でもありますし、藝大の先輩でもあるので、非常に心強いなと思っています。

河上さんと西尾さんも、河合さんにいろいろと教えてもらって、ますます、いい展覧会をやっていたらなと思っていますので、どうぞよろしくをお願いします。

【加藤委員】　小金井市教育委員会の学校教育部の指導室長をやっております加藤治紀と申します。よろしくをお願いします。

こちらのほうは教育普及の部分での関わりということで、委員として参加をさせていただいている状況かと思えます。

私も小金井のかつて教員でしたので、一度だけ子供たちを連れて来たことがありました。どうぞよろしくお願ひいたします。

【鉄矢会長】　よろしくをお願いします。

では、次第の3、事業報告、事業実施報告等について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】　1つお願いがございます。会議録の作成上、発言の冒頭にお名前を言っていただいてもよろしいでしょうか。実は前回の会議録で、お名前、どなたが発言したかがちょっと分からないところが多かったようだったので、委員皆様の御発言の際に一言、一番冒頭にお名前だけ頂戴できればと思います。よろしくお願ひいたします。

【鉄矢会長】　では、事務局から事業実施報告等についてお願いします。

【河上学芸員】　学芸員の河上です。資料1の1番の開催中の展覧会・教育普及事業に

ついて御報告いたします。

(1) 展覧会の1番の展覧会、現在開催中で、今、皆様にも御覧いただけたかと思うんですけども、「かげもまた光なり 一中村研一の色」ということで現在、所蔵作品展を開催しております。

会期が令和4年3月27日の日曜日から始まりまして、5月8日日曜日まで開催する予定です。

開館時間は、今、短縮をそのまま継続していきまして、午前11時から午後4時、入館は午後3時半までとしております。

同じく休館日も、月曜日と火曜日の2日間お休みにしていて、かつ今回、5月3日が祝日なんですけれども、こちら火曜日ということで、祝日ですがお休みにしています。

観覧料につきましては、通常どおり、一般200円、小中学生100円で、未就学児及び障害者手帳をお持ちの方は無料としております。

来館者数につきましては、こちらの資料にありますとおり、こちら実は4月の鑑賞教室が今月あったんですけども、市内、南小の4年生の鑑賞教室で来館した小学校4年生3クラス分と、あと教員の方を含めて、全て合わせて合計658人、現在のところ来館していただいております、開館から今22日たっているというんでしょうかね、22日オープンしているような状況なので、単純に割って計算しますと、1日平均29名ということで、前回の所蔵作品展、去年の夏と比べますと、大分戻ってきたのかなという印象を受けております。

②番の関連企画なんですけれども、これもコロナ禍ではずっと開催を見合わせておりました、今回はイベント、(1)番のギャラリーコンサートと、あと(2)番のワークショップの2つを関連企画として開催いたしました。

イベントのほうはギャラリーコンサートということで、会期の初日の前日の3月26日にギャラリーコンサートを開催しまして、こちらが参加者の方が44名ということで、満員御礼でありました。

そのときに、コンサートの後に少し、今回の展示の展示作品についてお話をするような機会をいただきまして、約20分ほどギャラリートークのほうも行いました。

(2)番のワークショップ「山本修路さんと美術館でワークショップ!」というタイトルなんですけれども、こちらは春休みに合わせて、小さいお子さんから大人まで楽しめるような企画をとということで、2日連続でワークショップをいたしまして、こちら、実は

事前申込み制ではなかったんですけども、非常にたくさんの方に来ていただきまして、参加者の方が、もういっぱいといいますか、15組をマックスにしていたんですけども、大体、入れ替え立ち替え10組。第1回が10組で、ちょっと第2回は少なくて1組だったんですけども、1日目のワークショップも、かなり大勢の親子参加者がいらっしやいまして、2日目のほうも、1日目のワークショップに来てくださった方がリピーターで来てくださったりして、全部で13組の計26名の参加者の方がワークショップに来てくださいました。

ひとまず、展覧会のほうは以上です。

続きまして、(2)番の教育普及事業のほうなんですけれども、今開催中の「かげもまた光なり」展のほうに、市内南小の小学校4年生、3クラス90名の皆さんが来てくださりまして、無事、各クラス1時間程度の鑑賞時間で、こちらのほうで絵画の見方や、あとは、学芸員とはどういう仕事なのかとか、あとは、ここの美術館の紹介を兼ねて裏の緑地をぐるっと回ったりして、そういう時間を各クラス過ごして、無事終わりました。この展覧会期間中はこの1校だけなんですけれども、また、ちょっと後ほど報告するんですが、この後も、続々と鑑賞教室を予定しております。

ひとまず、本展覧会に係る御報告は以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、次が今後の開催でいいんですね。

【事務局】 はい。

【鉄矢会長】 お願いします。

【中村学芸員】 では、今後開催予定の展覧会・教育普及事業、まず展覧会について中村から次、今やっている所蔵作品展の「かげもまた光なり」会期終了後の夏の企画展について御報告させていただきます。

小諸市立小山敬三美術館からコレクションを借用いたしまして、小山敬三展を計画しております。現在、仮題「浅間より出でその頂に至る」という形で副題をつけておりますけれども、小山敬三美術館からいずれも借りてきた作品を使って小山敬三の画業を紹介するという内容にしたいと考えております。

会期といたしましては、少しざっくりとした形になっておりますけれども、7月の下旬から9月の上旬を考えております。申請書を作成しているところで、実はこちらの資料2には希望している会期を具体的に書いてあるんですが、7月の28日から9月の4日とい

う形で申請をしています。会期を設定したいと考えているんですね。

ただ現在まだ申請中という形です。小諸市の教育委員会に借用期間の許可を取らなければいけないので、資料1ではざっくりとした内容になっております。

それ以降、開館時間、休館日、観覧料など、仮の項目が多いんです。ここはぜひ委員の皆様からも御意見をいただければと思っているんですけども、現在設定しているコロナ対策というのをどこまで継続していくか、同じレベルで継続すべきなのかというところで、次の展示のところでは、この部分を段階的に、できれば以前の形に戻していけないだろうかということは考えているんですね。

先ほど河上からも御報告がありましたように、所蔵作品展の中では、2年近く行ってこなかったワークショップが久しぶりに開催されて非常に好評であったということがあります。ギャラリーコンサートの中で、限定的な環境の中ではありますけれども、ギャラリートークも行って、これもアンケートの内容からうかがえるように、非常に好評でした。

そこで考えると次の展示の企画展ではワークショップもやればありがたいし、ギャラリートークなんかもやれば、お客様からは多分、喜ばれるだろうというのはあるんですけども、一方でやはりコロナ対策として、あまりに急激に前の状態に戻すというところで、不安を感じる方もいらっしゃる。加減に関しては現在、非常に頭を悩ませているところではございます。

開館時間も、もうこの2年以上、午前11時から午後4時までという形で、前後の1時間を短縮を続けてまいりましたし、休館日も月曜、火曜日という2日。通常、条例上の月曜休館を、コロナ対策として火曜日を追加する形で減少してきたわけですね。

一旦、コロナ対策でこれらの措置を継続するとは書いてはいるんですけども、ちょっとこの部分をどうしていくかというところは、ぜひ御意見を伺えればなと思っております。

それ以外にもこちらの報告には出ていないんですが、やはりミュージアムグッズもかなり点数を絞って、セット販売のみで2年間行ってきました。

ただ、やはりそういう形でグッズを売っていることの周知がなかなか進みません。例えばポストカード買いに来たのに何で買えないのと受付で残念がるお客様もいらっしゃいましたし、かといって、やはり受付の周りにグッズをたくさん並べるといふわけにはちょっといかない。ここも非常に頭を悩ませているところです。

肝心の展示内容に関しましては、ここは小山敬三美術館のほうから御協力をいただきまして、現在35点、借用の手続を進め、1階展示室のほうは小山敬三の作品で構成する内

容にいたします。2階の展示室に関しましては、中村研一の収蔵作品を展示するというような形で考えております。

展覧会の1番目に関しましては以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。今、学芸員の中村さんから、ちょっと議論をというお話がありましたけども、コロナ対策に関して、都美術館は先生、どんな感じですか。

【山村委員】 今も感染者は大体1日6,000人ぐらいかな。しばらく、前週の同じ曜日に比べて何百人少ないというのが続いていますけど、これがまた連休でどうなるかというのを、ちょっと気をもんでいます、一説には、また1万人を超えるんじゃないかというような話もあるし、東京都美術館に関しては、リバウンド警戒期間、延長になりましたけども、以前と対策を変えていません。緩めていないんですよ。

確かに共催者である新聞社のほうからは、もっと人を入れさせてくださいって、ずっと言われているんですが、1人4平米を守り通しています。

これも美術館だけの問題じゃなくて、東京都から指定管理を受けている身なので、財団、それから東京都といろいろ協議しながらやっているの、なかなか見通せないんですね。

美術館だけで判断することではないですから。小金井の場合も、市のほうと、よく相談しながら、やっていくのがいいんじゃないかなと思います。

【中村学芸員】 ギャラリートークとかそういったものでは、今のところは実施はいかがでしょうか。

【山村委員】 今も展示室では会話禁止ですし、それからギャラリートークもリアルではやっていないです。

その代わりに、オンラインでギャラリー・トークを配信するとか、そういうことは、かなり定例になってしまいましたね。大体、展覧会やっていると、そういうYouTubeの動画を作ったりとかすることが多くなりました。

【鉄矢会長】 時短もやっていらっしゃるんですか。

【山村委員】 時短はやっていないですよ。今までどおり、9時半から5時半まで。

そう。夜間開館はずっと中止していたんですけど、昨年、リバウンド防止期間になったときから、夜間開館してもよいという連絡がありました。財団と東京都のほうから。これ条例で金曜日夜間開館と決まっているので、ずっと問合せはいたんですけども、夜間開館が再開されました。8時までですけどね。

都のほうでは民間に9時までで店を閉めてくださいというふうにしていますので。

【鉄矢会長】 開館日は減らしていないんですよね。増やしてもない。元の。休館日増やしたとかあるんですか。

【山村委員】 いやいや、そんなことない。

【鉄矢会長】 ないですよね。

【原田委員】 よろしいですかね。

【鉄矢会長】 はい。

【原田委員】 原田です。利用者の立場でね。上野の美術館、何回か行ったときに、事前予約制なんですね。ですから、30分ごとになっているので、多分うまくばらけて、人も少ないのかなと思って行ったら、とんでもなくて、前よりも多いんじゃないかというぐらいにぎっしり。東博なんか、すごいですよね。

要するに、30分で時間指定で行っても、ばらけてみんな来るわけじゃなくて、固まって来るというんですかね。何か、とにかく固まっているんですね。

さすがに前みたいに大声で会話する人は少ないんですが、それでも、特に高齢者は会話をしながら見ていると。そうすると、係の人が、会話は御遠慮くださいという札を持っていくんです。それで、ようやくやめるみたい感じなんですね。

大変だなと思うんですが、今、先生のお話あったように、時間とか曜日は、あまり関係ないのかなという気がしたんですね。ですから、時間は、今までどおり10時から5時でしたっけ、とか、休みは週1でも、それほど密度が変わらないんじゃないかなと思います。

それからギャラリートークは、上野ではやっていないというお話があったんですけども、ただ、今日の資料でいうと大変好評ですし、何ていうのかな、教育効果も高いし、できれば続けてほしいなという気がするんですけどもね。

人数が、あの下の広さで30人くらいであれば。それから換気もしていますよね、美術館ですから。だから大丈夫ではないのかなという気はするんですけど。

【鉄矢会長】 鉄矢です。時間を短くしたことの原因が、多分、最初のコロナが分からなかった時代のときのものであって。なので、そのところを動かすとかいうのを市の中で話して合意していくということができれば、東京都の指導は受けたままとか、東京都がやっていることと同じことだよというような話ができるんじゃないかなと思っています。それも、もしかしたら、午前はそのままで午後だけ、5時まで延ばすとか、一段階ずつちよっと変えるとか、何かいろんな手法はあるのかなと。

休館日に関しては、コロナで2日になったんですけれども、もともとこちらの学芸員の働く環境としては、2日休まないとちゃんと申し送り事項ができないというのが、運営委員会の中でもずっと問題になっていたのも、これは、コロナというよりも、違う意味での、やっぱりここの休みの確保をしないと、ここの美術館で学芸員として働くというのが、何か働き切れなくなってしまうということにつながるのかなと思っていますので、そんな意見を持ちました。

【山村委員】 山村です。ワークショップの問題とグッズ販売については、特にそれをしたからといって、今、接触感染というのも、それほど危険じゃないというふうにも聞いていますし、手指消毒って皆さんやっていますので、そんなに問題じゃないとは思いますが、ワークショップに関しても、人数さえ絞ってやって、それで会話のときに気をつければ、難しくないというか、そんな危険ではないと思います。

東京都美術館のほうもワークショップは、普通ではないですね、注意しながらですけど、人数を減らしてやっていますし、グッズ販売は普通にやっています。むしろグッズ販売、結構、売上げ伸びているんですよ。

結局、人数を絞っているから、それだけ、その展覧会に強く関心がある人が予約で来てくれるので、図録にしても、グッズにしても、購買率がすごく上がっています。

【鉄矢会長】 確かに。俺、全部買ってるわ。

【山村委員】 だから、今そうしない手はないんじゃないかなという気がしますけどもね。

【中村学芸員】 一足飛びに全てのことを戻すというよりは、段階的にできることから少しずつ戻していくという形になるのかなと思っています。そういった意味では、今お伺いした御意見の中で、まずどこに着手するかというところを決める。その上で、さらにどこを次は戻していけるかという形で検討を加えていければと思います。ありがとうございます。

【鉄矢会長】 鉄矢です。感染対策を戻すんじゃなくて、感染対策を改善したというぐらいの。だから、何か元に戻すんじゃなくて、感染対策のやり方をちょっと変えましたよという表現のほうがいい気がするんですね。何か改善、体制を緩めていくというような表現になると、緩めたという問題なんだけど、状況を見ながら変更しましたという表現であれば、変更したんですねって。いや、変更したんですよと言っていけば、さりげなくやっておけば別に、対策はしていますという話になるので、と思いました。

【山村委員】 その辺、逆に聞きたいんですけど、小金井市のほうでは、たくさん公共施設がある中で、何か統一的なマニュアルってないんですか。

【事務局】 河田です。マニュアル的なものはなくて、大体、国と東京都の通知に基づいて、各いろいろな種類の公共施設の判断をしていますので。美術館というのも都の、通知の中でありませぬ。

【山村委員】 ありますけど、うちのほうも基本的には日博協のガイドラインに沿っているんです。

【事務局】 そこに合わせて、いろんな東京都からの何々期間、何々期間というのに合わせて、いろいろ施設によって開館時間などは調整をしているところではあるんですけども。

美術館は、最初にコロナ対策で、開館日とか開館時間を変更して、それがずっとそのまま来ているという感じ、今の現在に至っているというような状況です。

ですので、宮地楽器ホールなどは、もう開館時間は、もともとのコロナ前の開館時間と同じ、9時から夜の10時までというふうの開館してまして、大ホールなどのイベントの場合は、大声を出すイベントは定員の2分の1とか、それは、そういう劇場関係のルールの方に合わせてやっていますし、あと集会施設など、地域にある市民の方が使う集会施設も、9時から夜の10時まで、夜の10時までということで、大声を出すイベントの制限とか、あとカラオケは自粛してくださいとか、気をつけてくださいとか、そういうところで、都に合わせてやっています。今の段階では一応、大分、緩和じゃないんですけども、従前どおりにやっているところ、感染対策をしつつ、時間とか開館日に関しては大分、元に戻っているというのがありますね。

【鉄矢会長】 河合先生、いかがですか。

【河合学芸顧問】 入場者数の制限で言えば、座席数が決まっていたかつ前売りチケットが通例の音楽会などは人数のコントロールがし易いですよね。座席も一つ置きに指定して、つまり定員の半分以下で何とか後援してきた。当然赤字ですけど、観客の前で演奏できることにこだわるんです。美術館の場合、現在では大規模な展覧会は予約制が主流となっていて、一定時間の入館者数がコントロールされているので、かえって見やすいと思うくらいです。入場までに延々と1時間、2時間と並ばされる（待たされる）こともないです。ただ、主催者側の予測を超えて、大ブレイクすることも多々ある、東博の空也上人展もその一つでしょう。で、後追いで、プレイガイドで日時指定なしで販売していた

ものをすべて予約制に代えて対応していました。コロナが終わっても新聞社などの企画は予約制が主流でしょうけど、スマホなど苦手な方もいるので、当日券枠の配慮も欲しいところです。ちょっと話題が離れちゃったんですけどね。すみません。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。何か今の聞いていると、入れる人数は決まっていて、満杯になることはほとんどないんだと思うんですけども、入れる人数が入っちゃった後のことを考えると、何か展示室内部にライトがちょっとついて、外で待っている人がいますよというのが分かると、何か、ああ、俺、もうずっと長く見てたから出ようという感じで、うまく対流してくれるんじゃないかなと思って。何かそんなムードができると、この美術館の小ささが生かされるのかなと思って。

この美術館の小ささを生かした、何か仕組みができて、コロナ対策になって、部屋に入れる人数はいつもこの人数なんですよというのが出たり、あと、スーパーでたばこ買うみたいに、これとこれとって頼むと向こうから出してくれるとか。

【河合学芸顧問】 何か人数制限みたいなの、しているんですか。

【中村学芸員】 人数制限は、空間の中にいられる人数をもとに試算が出ていて、1階の展示室に関しては、基本的に当館に来るお客様の平均人数から考えると、相当余裕のある数です。

問題は2階の展示室で、2階の展示室のほうが狭い。空間あたりにいい人数で考えると、たしか18人がマックスの人数であろうと。そうすると2階に関しては、実は鑑賞教室のときなんか明らかに、一クラス30人ぐらいとですから、一度に入れないということのはっきりしているんですね。

それ以外の日でも例えばグループで10人ぐらい来たいというお客様が来ることが分かっていたりすると、ちょっと2階に入るのを待ってもらおうという形で、1階で少し待機してもらって、半分ずつ行ってくださいとか調整するということは行っています。

【河合学芸顧問】 この間、市の職員の新人研修でしたっけ。下で待っている人と、上に行きたい人と分かれていた。そういうふうに、ある程度まとまっても、それ事前に登録されていれば、コントロール、こちらでできるわけですよ。

【鉄矢会長】 では、このディスカッションというか、この意見交換、ちょっとこれで一旦切って、②番の展覧会、志村信裕ですか、お願いします。

【河上学芸員】 河上です。2番の展覧会、これ、まだタイトルが決まっていないんですけども、「志村信裕展」ということで、映像作家の志村信裕さんによる個展の企画を

予定しております。

こちらの企画は、通常の企画展と少し違いまして、会場が1階の大きな展示室ではなく、メインは外の茶室を使って展示を行うというものです。

それに加えて、茶室で志村さんの作品を見せつつ、志村信裕という作家がどういう作家なのかというのを御紹介するという目的で、2階のラウンジを使って、志村さんの旧作で構成されたインスタレーションを見せられたらなというふうに今、考えているところです。

会期といたしましては、10月いっぱいじゃないか、30日までですね。10月1日の土曜日から30日日曜日を予定しておりますが、これもまだちょっと仮で入れているようなところです。

開館時間も今、中村のほうから御相談があったように、ここも段階的に、だんだんと、元に戻したり変更して、今、仮で入っているのは、現在の開催中の展覧会と同じ11時から4時というふうに入っておりますが、ここも変わってくる可能性があります。

休館日も同じく、これは月火のままの可能性が、今のところでは高いかなと思っております。

観覧料につきましても、まだ全て未定なんですけれども、この一般500円で、今（再入場あり）というふうにしてるのが、2階のラウンジのほうで展示をしようかなと思っている作品が、長編の映像作品で、大体50分から60分のドキュメンタリーの映像作品なので、多分一度に、一気に見ていただければ、それはとてもうれしいんですけども、時間がなくて見れないというお客様もいるかなと考えまして、再入場ありで対応できたらいいかなと思っているのと、あとは、通常の企画展よりも規模は小さいので、500円、いつもと同じ金額、500円を支払って、これしか見れないのというふうになってしまうのを避けるために、再入場ありで今、検討中です。

以上です。

【河合学芸顧問】 再入場というのは、日にちが違ってもいいんですか。

【事務局】 そういうふうにしてしようかなと、今ちょっと、まだ要検討なんですけれども、できたらいいなと思っています。

【坂井委員】 河上さん、私、志村信裕さんを全然存じ上げないんですけど、ざくつとどんな方なのか。あと茶室を使うってすごく珍しいと思うので、茶室を使うとどういうことがある。

【鉄矢会長】 すみません。おまけに、なぜはけの森美術館でやるのか、そこのつなが

りを。これ多分、新企画だと思うんですよ。上は小さな美術館の個人的な作品でやるというので、はげの森美術館の流れがあるんですけど、これは新規の茶室。そこで、やっぱり何でここでやるのかというのは。

【河上学芸員】 まず、茶室を使うというところは、もともと茶室を改修をして、茶室を使った企画を市のほうでも考えていたところでコロナが始まってしまって、その活用方法についてずっと検討をしていたところなんです。ただ飲食を伴うイベントというのが、お茶室なので、お茶をたてるとか、お茶会をするというふうなイベントが難しいということで、じゃあ飲食を伴わずに何かできないかということで、今回、展示空間として使えないかとなりました。作品を展示することで、中に入らずに外から、中に作品を展示して、それを外から、茶室のしつらえも含め、お客様に見ていただけるようなイベントができないかというところから、まずスタートしているんですけども。

なぜ志村さんかというのは、まず志村信裕さん、和室での展示をしたことがあるということ。文化財での展示を経験されていて、映像の作家さんというのは、例えば映像の作品ももちろんつくっているんですけども、彼の代表作は、映像投影して、その空間全体を作品化するというのがすごく得意としている作家さんなんですね。なので、今回、まだちょっと練っている段階なので、どういう作品になるかというのが分からないんですけども、あの茶室の中の空間全体を使って、映像を投影して外から見せるという、そういったものを考えているんですけども。

【坂井委員】 音響なんかもあるんですか。

【河上学芸員】 音はなしなのかなと思っています。というのも、やっぱりはげの、空間の外の小鳥のさえずりとか、風の音とか、ああいう音は、私としても残したいというのものもあるし、作家さんも、やっぱりそこを生かせたらというふうに思っていると思うので、恐らく今回、音なしの、本当に映像のみを使った作品になるのではないかと考えています。

ただ、それだけだと、やっぱりどんな作家さんか分からないということもあって、志村さんてどういう人という質問も出てくるかと思ったので、近年の代表作を展示し、紹介ができればと考えていて、そのときに、ここのラウンジ、今通ってきた、あそこの暖炉のあるお部屋を展示室にして、そこは特に空調とかが全く整って、普通の家庭用のエアコンは入っているんですけども、空調が入っていないんですが、この作家さんは特にそういった問題を、何か絵画を、油彩を展示したりとかという、空調が必要な作品はつくっていないので、ちょっとあそこの部屋を生かせるような、一つ展示というか、インスタレーショ

ンをまた、していただけたらなというふうに今、お願いしているところです。

【山村委員】 志村さんは小金井に住んでいらっしゃるんですか。

【河上学芸員】 志村さんはもともと小金井に全然、縁もゆかりもないんですが、ただ、武蔵美卒で、もともと御出身は、東大和の御出身なので、この辺り、西東京には非常に親近感を持っていらして。今、千葉県にいらっしゃいます。

あとは、個人的な見解ですが、非常に茶室のわび寂じゃないんですけど、茶室と志村作品の親和性が感じたもので、直感的にぱっと思い浮かんで。茶室だったら志村さんに頼むととてもいい空間ができるんじゃないかというような、そういうところからちょっと始まったので、地域的につながりがあるとか、ゆかりがあるというところではないんですが。

【山村委員】 お幾つになるんですか。

【河上学芸員】 38か9か。

【山村委員】 随分若いんですね。

【河上学芸員】 そうですね。

【坂井委員】 鉄矢会長の御質問になった、なぜ志村さんという辺りでいくと、まず茶室を使いたいので、適切な作家さんを探したら行き当たったという。

【河上学芸員】 そうですね。はい。

【坂井委員】 そうなんですか。

【河上学芸員】 なので、志村さんの作品がぱっと出てきたというところから始まった。

【山村委員】 でも、茶室を使うというのは別に、あれでしょう、空間を使うんですね。

【河上学芸員】 空間を使うということですね。なので。

【山村委員】 だから、インスタレーション作家ですよ。

【坂井委員】 そういうことですよ。

【河上学芸員】 そうです。

【山村委員】 じゃあ、山ほどいるんじゃないですか。

【河上学芸員】 山ほどいると思うんですけど。

【鉄矢会長】 多分、今お話聞いていて直感できたというのを、ぜひともこれが始まる前までに言語化していただきたいなと思うので。

【河上学芸員】 それはカタログで論稿を書こうと思っているところなので。

【鉄矢会長】 それが、その中に多分、はけの森の茶室であるというところをうまく表

現していただきたいなというのと、何となく心の中で、第2弾が誰なのかって。ここの茶室の、この空間を使ったというのが、第2弾を想定していくと、多分ストーリーが組めるんだと思うんですよ。

【河上学芸員】 実は、そうなんです。これを茶室と、花侵庵と現代作家というような形で、定期的と。例えば1年に1回とまでは言わなくても、定期的にぽっぽとできていたらよいのではなからうかというような、ほわっとしたアイデアは今、学芸内で持っているので、そうすると、茶室の活用という面でも一つありますし、あとは現代作家を紹介するというような、一つ新しいことができるのかなというふうにも思っています。

【山村委員】 ちょっと厳しいこと言うと、住民の人とか、小金井市の人から、何でこの人と言われたときに答えられなきゃ駄目だから、何かの理由を、今、鉄矢会長が言われたこととか、この先の方針とか、何か理論化してもいいなど。じゃないと、学芸員が勝手にやっているみたいにとられてしまうので。

最終的には学芸員の直感はずごく重要なんだけど、直感を言語化して、説明できるようにしておかないと、すごく危ないですよ。

【河上学芸員】 はい、分かりました。これに関しては、イベントとしてではなくて、展覧会としてきちっと成り立たせるように、小さな記録集を付随させようというふうには考えているので。でも、その前の段階できちっと私のほうで説明できるように、本来はしておかなければならなかったと思うんですが。

【山村委員】 有名なのだと、大原美術館で、やっぱり近くの古民家（無為村荘）を使って若い作家をシリーズでずっと支援している滞在制作の試み（ARKO）とか、ほかにもやっているところがあるから、そういうのもよく調べて、こういういろんな可能性がある中で、この美術館はこういう特色を出すために工夫しましたとか、やり方はあるから、調査は絶対やったほうがいいですよ。

【河上学芸員】 ありがとうございます。はい。

【鉄矢会長】 面白い方なら、それこそ、なぜ、下の1階の大きな部屋は使わないのかというのも疑問なんですよ。

【河上学芸員】 予算的な問題もありますし、あとは次の、今回、今年度は、実は企画展が3本入っているんですけども、プラス所蔵作品展なので、展覧会4本あるんですが、スケジュールの関係で非常にそこら辺が、1階をそこで使っちゃうと次の。

【鉄矢会長】 展覧会に引っかけちゃうんですね。そういう意味ですね。

【河上学芸員】　　そうですね。展示替えの本当に物理的な問題とかがあったのと、あと、もともとは小企画として、この企画が始まっているので。

【鉄矢会長】　　私も志村さんを存じ上げないので、もし学芸員の目を信じるんだとする
と、例えば武蔵美、多摩美、出たやつが一番最初に唾つけるのがこの美術館だというぐ
らいの感じでね。どこかで出てきて、いいものを持って来るんじゃなくて、一番最初にば
しってやってくれるとすごく、だんだんこれがどんどん若返って行ってね。

【河上学芸員】　　ああ、若返って行って。

【鉄矢会長】　　若返って行って、そのうち、学芸員の目ももっと鍛えられて、お互いが
しっかりできるようになっていただくというぐらいの。

【河上学芸員】　　卒展を。卒展がきっと。

【鉄矢会長】　　そういう機会になるというのも、できたらすごくうれしいですけど。で
も、そこまでいなくて、どこかがやったものを見て、ああ、いいなと行ってやっていく
と、も悪くないんですけど……。

【河上学芸員】　　今回は、ちなみに、新作が茶室のほうは、旧作ではなくて、はけを今
回用に構成してくださるといような形になると思うので。

【山村委員】　　作家には絶対そう言ってください。ここでなければならぬ作品をつく
ってくださいって。

【河上学芸員】　　はい。じゃないと、やっぱり、ただの展示空間になってしまうという
か、茶室である意味もないしというのものもあるし、茶室だったから志村さんに頼みたいとい
う、何か私のちょっと直感的なそこを裏づけるためにも。

【山村委員】　　茶室だったからというより、はけの森のこの空間は志村さんしかいない
と学芸員が思って、そう依頼した作家のほうもすごく本気になってくれて、ここでしかで
きない空間をつくりますという、何かそういうストーリーとかつくっておかないといけな
いと思う。

【河上学芸員】　　そうですね。はい。

【山村委員】　　茶室だからとかということだと、ちょっと。

【河上学芸員】　　弱い。

【山村委員】　　今は弱いかもしれないですよ。

【鉄矢会長】　　あと、ぜひ鑑賞の時間。ビサイドアーティストスタイルという鑑賞、対
話的鑑賞じゃなくて、アーティストのそばで、アーティストがつくる瞬間を、やっぱりこ

れ横で見ているら面白そうな気がするんですよ。

【河上学芸員】 横ですか。制作過程をですか。

【鉄矢会長】 ええ。だから、制作過程を、どこか公開制作過程の時間があっても。この期間の前に何日間セッティングしているよというのは、見に来れるとかあっても。現代作家ってそういうのが、それは面白いところだし。その考えているところのドキュメンタリーも多分、撮ってくれると面白いですよ、写真で、映像で。

【河上学芸員】 そうですね。考えているところのドキュメンタリー。そうですね。でも、つくっている方、特に映像なんかはどうやってつくっているんだろうって。

【原田委員】 原田です。何かよく分からないんですけども、要するに、普通に絵が展示される展覧会ではなくて、空間を使って、いろんな表現をされると。となると、森自体を使う、山への何か作品みたいなものがあるんですか。

【鉄矢会長】 プロジェクターで多分、映し出す。

【原田委員】 プロジェクター。映像中心ですか。

【河上学芸員】 そうです。プロジェクターを。映像を使って、プロジェクターから投影をしてという、それが実際、例えば映画みたいにドキュメンタリーも撮るし、そのドキュメンタリーに関しては、こっちのラウンジで展示をするんですけど、茶室については外で、こうやってドキュメンタリーを見るような環境ではないので、その空間。何て言ったらいいんでしょうかね。ちょっと難しい。資料を御用意すればよかったですね。そうですね。

【原田委員】 いや、何かはけの森の竹やぶの中に映像が映ったりすると。

【河上学芸員】 そういうのも、もちろんあったんですけど。そういうのも以前に志村さん、されて、外の木に投影をすとかというのは。

【原田委員】 じゃ、可能ですね。

【河上学芸員】 あるんですけど、今回は本当に茶室の中を使ってというふうに考えているようなところです。

【鉄矢会長】 学芸員の現代アートへの思いが如実に出てくるので、頑張ってください。

【河合学芸顧問】 いや、本当にいいですよ。同時代を評価しなくて、どうするのか、それはやるべきだと思うし。

ただ、あまりよそ様のことを言ってもしょうがないんですけども、たしか、この作家は庭園美術館のグループ展「生命の庭 8人の現代作家が見つけた小宇宙」に入っていました

たよね。

【河上学芸員】 そうですね。庭園美術館でグループ展。千葉県美、千葉市美では個展もされていて、国際展にも出ているような作家さんなので。

【河合学芸顧問】 だからこそ、はげの森オリジナルというのがあって、志村さんのこれから長い作家活動のなかで2022年にこの年にこの美術館での記録が必ず出てくるということ、これはこの美術館にとっても、やっぱり同時代に関わってきたということですね。それは作家と美術館という関係ではたいへん重要になるんです。

【河上学芸員】 ありがとうございます。

【鉄矢会長】 多分、内部の作家だったら、今、本当にロシアで起こっていることも全部来ちゃっているから、見せるに見せにくいものが出るのかもしれないし。

【河上学芸員】 そうですか。別にそういう。多分、はげに特化していると思います。ありがとうございます。

【鉄矢会長】 じゃあ期待してプレッシャーかけていきましょう、学芸員さんに。ありがとうございます。

では、(2) 番の教育普及事業のほう、お願いします。

【西尾学芸員】 学芸員の西尾です。鑑賞教室に関しましては、去年度初めてコロナ禍での鑑賞教室が全て完了しまして、その上で当館ではコロナ感染者等の被害出なかったということを受けまして、今年度も引き続き、こちらの日程で、鑑賞教室開催することが決定しております。

先生方とも2月頃にお話をしまして、こちらの美術館の学芸員の負担のない程度に、事前授業の代わりに、事前授業用に先生方が使えるワークシートを学芸員のほうで作成して、それを希望する学校にお渡ししながら連携して鑑賞教室を行っていくという形で、今年度も実施するということが決まっております。

以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。何か質問等ありましたら。

それこそ、これ、あれですね。オンデマンドの映像でもよさそうですね。ワークシートじゃなくて、もう何か子供と一緒に見て見るという、YouTubeの動画になって、事前学習の、1個あれば、全部それが見れば。

【西尾学芸員】 その展示風景を……。

【鉄矢会長】 展示風景じゃなくて事前授業。事前授業を学芸員の方がやったものを録

画して、それを配信するという。

【西尾学芸員】 なるほど。そうですね。

【鉄矢会長】 いや、今じゃないですよ。今後そういうのがあるだろうなということです。

【西尾学芸員】 ちょっといろいろ、まだ事前授業が、やはり非常勤の学芸員が実施するのは大きな負担だという話は、私が着任する前の問題として伺っておりまして、それを解決する上でどうしていくかということに関しましては、今はワークシートという形で対応していますが、今後も、よりよい案があったら、考えて実行していければとは考えております。

【中村学芸員】 あと、伺っている限りでは、小金井市内の小学校のほうで、やはりそういうオンラインでの対応するためのツールというものの整備は進んでいるそうなんですけど、ただ、完全ではないということなんです。なかなかこちらのほうで把握が難しいところがあります。

そこでいうと、やっぱりオンラインでできるものという前提で組んでしまうと、取りこぼされてしまうところがあって、そこでいうと、少なくとも現段階においては、ワークシートというアナログの方式ではありますけれども、紙で配るというほうが取りこぼしはないという、そういう……。

【鉄矢会長】 CDで録画、DVDにして配ればいいじゃないですか、それは。

ただ、分かります。鉄矢です。ただ、小学生にとって、学芸員という方に出会って特別な話が聞けるのと、いつもの図工の先生がしゃべるのとはちょっと違うので、もう一回、あつテレビに出てた人がいるという、あのうれしさがちょっとあるのかなと思っていました。

【中村学芸員】 結構やっぱり学校の、これは図工の先生の、どちらかというところ、オンライン関係においてモチベーションみたいなものというところもあるんですけど。

【鉄矢会長】 そうですね。だから、オンラインと言ったらいけない感じで、視聴覚資料です。視聴覚資料を作ればいいのかなど思っただけです。

【原田委員】 関連で質問です。原田です。これ加藤委員にちょっと教えていただきたいんですが、GIGAスクール構想とかいって、要するに、iPadか何か、パソコンは全員、もう配られているんですよね。

今の話だと、なかなかそれはまだ濃淡があって使い切れないという。実情をちょっと教

えてください。

【加藤委員】 加藤です。どういうふうに確認をされてきたのかがちょっと分からないので、そこはどうかかなと思いますが、現状としては、クロームブックと呼ばれるものですね。小さなパソコンだと思っていただければ間違いはないかなと。それが全員に配られている。児童生徒全員持っていますというのが現状です。

学校内には、基本的には教室にはW i - F i が飛んでいる状況でして、いつでもネットにアクセスできるという環境にはなっています。

【坂井委員】 小中高全部ですか。

【加藤委員】 高校は我々の管轄ではないので。

【坂井委員】 小中で。

【加藤委員】 はい。要するに、小金井市立小中学校が私たちの担当ですので、そこでは全部そうなっているという状況です。

当然、フィルターとかもかかっているんで、例えば今、YouTubeという話がありました。何でも見れるとかそういう話ではないというところもありますけれども、ネット自体は、どこでも使えます、正直言って。学校差はそんなにはないはずで。ですので、さっきの学校によってというところが、どこを言っているのかなというのがちょっと引っかかってはいましたが。

例えば何か動画を使って、本当は端末手前でも見られるんですけども、教室には大きなテレビも各教室ありますので、そこで仮に短い動画を視聴して、その後は、じゃあワークシートで書いておくとか、そういったようなことは可能ではある環境かなと思います。

以上です。

【原田委員】 よく分かりました。学芸員さんの顔が映って、優しく解説していただくのを教室で目の前で見られたら、ますます興味も湧くと思います。

【中村学芸員】 ここに関しては、どちらかというところ、そういう意味では、環境というところでは多分、本当に、このコロナ禍の中で急速に整備が進んだところはあると思います。

ただ、やはりそういう環境をどう活用していくかという意味でいうと、やはり模索の中でやっていったので。実はそういうオンラインのツールを活用できないかというのは、実はかなり初期の段階、2019年とかの辺りでは出ていたんですね。

ただ、やっぱりその時点では具体的に、じゃあ、それをどう活用していくかというところ

ろで思いつかない。じゃあ、どうしよう。そもそも学校にも、まず生徒が来られないわけです。そこでさらにオンラインのことを考えていく余裕というところかというと、学校側、美術館共に、ちょっとないだろうということだったんですね。

そこでいうと、本当それこそ映像を流しっ放しにして、それを子供が見ているかどうかも分からないけれども、とにかく流しっ放しにするということになっちゃうのであれば、それよりはアナログで確実にある意味で手応えが分かるようなものということによっていくほうがいいんじゃないかというのが、これは2019年段階での判断だったわけですね。

現在、そういう意味でいうと、そういった事前授業の方針というものが継続されてきているということで、ワークシートの形というのは発展して改善されていっているという形ではあると思うんですけども。

ただ、そういう意味でいうと、オンラインを活用できているかというところでいうと少し、あまりできていないところではあるんですけど。ただ、やっぱりこのワークシートを配る方式に関していえば、2021年度で実際に一定の手応えが感じられたということであれば、それを継続して発展させていくということは、これは意味はあるんじゃないかなと考えています。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

すみません。議事進行は。では、4年度の事業予定と予算についてお願いします。

【事務局】 津端です。よろしくお願いします。事業予定については今、学芸員から説明がありましたので、予算について御説明いたします。資料の4番の横の一覧表のほうを御覧いただきながら、お聞きいただければと思います。

予算につきましては、昨年度に比べ全体は増額となっております。増額した項目について御説明いたします。

表の1つ目のはけの森美術館の運営に要する経費では、開館15周年記念冊子の作成に係る費用が増額となっております。

同じく15周年を主な理由として、表の上から3つ目のはけの森美術館事業に要する経費というところで、通常、企画展で2回のところが企画展、もう一回分、増額となりました。企画展3回分と所蔵作品展1回分の予算が今年ついております。

同じく増額になりました4つ目の美術の森緑地の維持管理に要する経費というところなんですけれども、こちらの高木剪定ということで、すごく高い木を切るのにとってもお金がかかるんですが、そちらの予算が今年はつきました。予算がつく年、つかない年がありま

して、今年はついたので、去年よりも増額に見えているところです。

2つ目の減額となっているところなんですけれども、こちらは喫茶棟の冷暖房機の備品の購入の予算が昨年度ついていたものが、備品のほうが購入が終了しまして、今年の特についていないというところで、実質上の減というよりかは、その分が減少として数字のほうに出ているというような状況でございます。

次に、下のほうに書いてあります助成金の取得状況について御報告いたします。今年はいくつか2本獲得できております。

1つ目が、財団法人地域創造のほうから頂きました市町村立美術館活性化事業の共同巡回展、仮称、アジアの美術展ということになります。今年度が準備年度で来年度が実施年度ということになりますので、実際に展覧会、こちらの美術館でやるのは来年度になります。

幾つかの全国の美術館のほうで巡回展ということで回るんですけども、今回の巡回展のほうでは、長野県の上田市立美術館と三重県の四日市市立文化会館、あと広島県のはつかいち美術ギャラリーとの巡回展ということになりました。

こちらの美術館でも以前、平成29年度と30年度で同様の共同巡回展のほう実施しております、それ以来の実施となります。

2つ目が、公益財団法人のポーラ美術振興財団から頂きました令和4年度美術館職員の調査研究助成ということで、タイトルを全部言いますと、「近代洋画家・富永親徳に関する基礎的研究—台湾期を中心とした制作活動の確認と整理—」ということで助成を頂きました。こちらが、富永親徳さんのアトリエが小金井市にあるということで美術館のほうに御連絡をいただいたことを契機として、調査研究をすることになっております。こちらは学芸員が研究チームを組んで受け取っております。

昨年まで応募していた「東京の多様性を活かした観光まちづくり推進支援事業」では、幾つか美術館の周りの整備もしてきたところなんですけれども、こちらは昨年の時点で同じ場所での、この一帯での申請というのは、もう、この昨年度で最後になるということなることを助成元から言われていたので、ちょっと今年度の申請は難しくなりました、今年はいくつか応募しないということになっております。

助成の報告のほうと、あと予算の報告については以上になります。よろしくお願ひいたします。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。質問等ございますでしょうか。

鉄矢です。今、学芸大でなんですけど、高木剪定のほうは、アーボリストという、高所作業車を入れないで、木登りをしてロープでやっていく人たちが入ったりしてやっていく場合が出てきていますので。

【事務局】 もう一度名前をきいてもいいですか。

【鉄矢会長】 アーボリストという方。どうしても高所作業車が入れないところなんかがあったり、高所作業車で入っていくと、ざばざば切っていくので、もっと丁寧に切るといった人たちが、そういうのをやっているみたいですね。

では最後に、その他についてです。意見交換などがあれば、お伝えいただければと思います。よろしいですか。

それでは、次に、事務局から会議録の校正についての説明をお願いします。

【事務局】 皆様のお机に会議録のほう、昨年度の最後の審査会のものを置かせていただいております。

こちらなんですけれども、確認いただきまして、修正等ありましたら、5月の20日までに、コミュニティ文化課のほうまで御連絡をいただければと思います。その後、ホームページのほうに、また掲載をさせていただきます。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

【事務局】 あともう一点、ごめんなさい。チラシのほうの説明も一緒にさせていただいてもよろしいでしょうか。

【鉄矢会長】 はい。

【事務局】 今回、小金井市芸術文化振興計画推進委員を公募しますということで、置かせていただきました。こちら昨年度、芸術文化振興計画ということで、市の文化振興の計画のほうを策定いたしました。それに伴いまして、推進委員ということで、委員会のほうが今年度から始まります。

今、市民の委員ということで、市内に在住、また在勤、在学の方が対象にはなるんですけども、委員さんのほう3人募集をしております、4月の15日から始まって5月の13日までが応募の期間となっております。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

【坂井委員】 鉄矢会長、すみません。ちょっと戻るみたいで、その他の中でよろしいですか。

【鉄矢会長】 はい。

【坂井委員】 遅れてきて申し訳なかったんですけども。今回2つ、新しい、7月と先ほどの映像作家さんの作品を拝見して、私、委員をさせていただいて2年たったんですけど、その委員をしている間の何回かの展覧会が、もちろん中村研一の旧作をやったりしているということもあって、中村研一つながりのものをずっとやっていらして、今回の「かげもまた光なり」、面白かったんですけど、もちろん中村研一さんで、この美術館の一つ、それが制約というか、縛りなのかなとかって思っていたんですね。中村研一つながりをやらなければいけないというような。

そうしたら今度、7月と10月は全然違うのが出てきたので、あっ縛りはないんだという部分、逆に再発見させてもらったようなところがあるんですけど、そこって何か規定。例えば、何回かの企画のうち何回分は中村研一つながりじゃないといけないとか、何かそういうあれがあるんですか。それとも、なくて、割と自由に企画運営できると考えていいんでしょうか。

【中村学芸員】 学芸員の中村です。ここに関しましては、企画展に関しては大きく3つの柱を立てていて、その3つの柱のいずれかに係るものか、もしくは複数の要素に係るものかという形で考えていくことになっています。

先ほど御指摘がありましたように、中村研一のことを研究するのは、これは大きな柱のうちの一つであって。中村研一はどのような画家かということ、近代洋画家なわけですけども、派生する形で近代洋画のことを考えていくことは、これは中村研一の研究に派生する形で行うところだというふうに捉えられています。

そこでいいますと最初の小山敬三展。小山敬三は中村研一とほぼ同年代で、ほぼ同じタイミングでフランスに行って帰ってきているという人なんですね。

同じタイミングで向こうに行って、向こうで過ごして絶対顔見知りなんだけど、何かお互いにやり取りがあまりないという、ちょっとそこは不思議なところではあるんですけども中村研一と同時代の画家です。近代美術に関するところを研究するというのが、まず柱としては1つ目になります。

2つ目、当館は小金井市立、市立の美術館ですね。本市以外にも市立の美術館、公立の美術館で各地にいろいろな美術館がありますけれども、中村研一以外に、例えば、この小山敬三もそうですけれども、各地方に特色を持った公立美術館で、かつ同じぐらいの規模というのはたくさんあるわけで、そういうところがどういう活動をしているのかということを知ることによって、改めて、じゃあ、小金井市立の中村研一を展示している、はけの

森美術館はどういうところなのかが見えてくる。つまり地方の特色ある、特に市立とか、そういう公立の美術館を紹介するというのが柱の2つ目ですね。

3つ目が、これはどちらかというより広い形で解釈できるものですがけれども、特に地域の子供たちであるとか、これからいろいろなことを知って美術に関することに興味を持っていく年代に対して、関心を高めるきっかけになったり、小金井とか、はけという環境に対して特別な価値を見いだしていけるような契機になる展示。

これでいいますと、多分この2番目の志村信裕展なんかは、そういう、これからいろいろなアートであるとか、芸術であるとかというものに触れていく人たちにとっての、何かそういうきっかけになるような部分というところと、それから、はけという環境という部分に対して、何か興味を持つきっかけになっていくという、そういう観点に当てはまる部分だと思っています。

この3つの柱というのが基本的には企画展の中で、美術館がどういう企画展をするかを考える上での基準になっているという形です。

【坂井委員】 分かりました。結構知らなかった事実でした。

【鉄矢会長】 あと補足すると、やっぱりコロナで、美術館との行き来がなくなったので、ここの所蔵品が多かったんです。

【坂井委員】 なるほどね。

【鉄矢会長】 ここのところは。

【坂井委員】 ああ、そういうことですか。

【中村学芸員】 そうですね。特に地方に行くというのは、これはちょっと、とてもできない時期があったので。しばらく手持ちの作品を出すしかないだろうというような形で対応していた時期もあります。

【坂井委員】 よく分かりました。ついでにと言ったら失礼なんですけど、この「かげもまた光なり」を拝見して、何度か私、あまりこの美術館で見たことがなかったんですけど、展示作品が意外と、毎回拝見しているんだけど毎回新しいのがあるなというのが結構びっくりしまして。どのぐらい持っているんですか、中村研一を。

【中村学芸員】 中村研一でいいますと、今、大体800点ですね。

【坂井委員】 そんなにあるんですか。

【中村学芸員】 そのうち、油彩作品でいうと300弱あります。

【坂井委員】 そうなんですか。

【中村学芸員】　　ここが開館したのは2008年ですから、その時点でいうと750点ぐらいだったんですけども、その後、寄贈で毎年毎年ちょっとずつ増えて、今800弱ぐらいまでというような形ですね。

裸婦に関しては、実は結構あるんですけども。

【坂井委員】　　そうなんですか。

【中村学芸員】　　そうなんです。これはちょっと当館のなかなか悲しい事情ではあるんですが、額が足りないんですね。作品としてはあるんですけども、額がない。ゆえに壁にかけられない状態のものが実は幾つかありまして、結構長い間、額を作らせてくれということは市のほうに予算として申請して、申請するたびに却下されていたんですけども、ここ何年かで額を作る予算が認められるようになりまして、1年に今、1点か2点ぐらいのペースではあるんですけども、額のない作品に対して額を作っているところです。

今回の展示のほうで出展されている裸婦像も、あれも大型の作品だったんですけども、額がなくて、ちょっと裸のままですすわけにもいかないもので、そのまま、もう10年以上出せずにいたというものが、近年、額がつきまして、出せるようになりました。

【坂井委員】　　そうなんですか。分かりました。数も含めて、どうりで毎回、800あれば、うち300、どうりで毎回見たことがないものが出てくるな。それで納得できました。

【山村委員】　　収蔵庫は余裕はあるんですか。

【中村学芸員】　　収蔵庫は、まだあります。

【原田委員】　　原田です。私も同じ感じで、今日拝見して、これ見たことない、こんないっぱいあるんだと思って、大変楽しく拝見しました。

今年度は、もう所蔵展というのはないんですか。

【中村学芸員】　　このままいきますと、また1年後ぐらいですね。3月の末に、また年度をまたぐ形で、所蔵作品展が1つ入る予定です。

【原田委員】　　また、びっくりさせてください。

【坂井委員】　　失礼しました。ありがとうございました。

【鉄矢会長】　　そのほか何かございますか。

ほかになれば、以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。ありがとうございました。